

## はじめに

小掠彩

本書はJSPS学術振興会科学研究費・基盤(B)(21H00518、23K20456)「ロシア・中東欧のエコクリティシズム——スラヴ文学と環境問題の諸相」(代表・小掠彩)と、二〇二二年一月一七日に京都大学文学部で開催されたワークショップ「ロシア・東欧の『パストラル』の諸相」(日本ロシア文学会若手ワークショップ企画賞受賞、代表・五月女颯)の研究成果である。上記科研費研究プロジェクトは二〇一九年度北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター「プロジェクト型」共同研究「中東欧地域のエコクリティシズムに関する研究」の後継として、ロシア、ベラルーシ、ポーランド、チェコ、ブルガリアをおもな調査対象とする文学者・文化人類学者・社会学者によって二〇二一年より開始され、この科研費助成により、日本スラヴ学研究会発表会でのパネル組織(パネル名「鉱山の光景」、二〇二二年三月三〇日、オンライン開催)、ヘルシンキ大学准教授ティンティ・クラプリ氏の日本招聘と講演会開催(二〇二三年九月二九日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)、およびシンポジウム「スラヴの森」開催(同三〇日、北海道大学文学部)がなかった。本書にはロシア

東欧学会二〇二三年度研究大会・共通論題「スラブ・ユーラシアの環境を考える」（二〇二三年一月四、五日、京都大学文学部）での中村唯史、小椋彩の各報告と討論の過程で得られた知見も反映し、イギリスのロマン主義を代表する詩人ワーズワスを「ポスト・パストラル」の視点から考察する論考（吉川朗子「ウィリアム・ワーズワスの描く英国湖水地方の自然と共同体——パストラル、エコロジー、ナショナル」）や、日本文学から環境をまなざす論考（伊東弘樹「幸田露伴の水都東京論——日本のパストラル受容の一つとして」）も加えて、より広範な視野から文化と環境をとらえようという試みである。

エコクリティシズムの目的とは、端的に言って、環境と文学の相互関係に注目することだ。エコロジカルな思想を取り入れた文学批評の枠組みとしてアメリカで生まれ、一九九〇年代に学問として組織化されると、二〇〇〇年代に入り、文学のみならず文化全域に及ぶ批評の枠組みとして急速に拡大した。その展開について簡単に追うならば、アメリカのネイチャー・ライティングへの注目に始まり、パストラルやイギリス・ロマン主義の自然へのまなざしなど自然表象に関心が向けられた第一波、理論的広がりとともに大都市や産業にも関心が向けられるようになった第二波、多文化主義的傾向が見られる第三波を経て、現在は、人間が地球に与えた影響を考える「人新世」の議論に象徴されるような、新たな波が観察される。世界中の環境問題の緊急性への認識とともに、それぞれのテーマが発展する形で、地域的にも学問領域的にもいまなお多様に展開し続けている。

一方、エコクリティシズムが英米文学批評に起源をもつゆえに、研究の取り組みの地域的不均衡はかねてより指摘されてきた。英米文学研究の文脈でのここ数十年にわたる急速な発展と比較して、近年根付き始めたばかりという国・地域も多い。

本書執筆者の大半が研究のフィールドと定めるロシア・中東欧地域の、スラヴ諸語が話されるスラヴ語文化圏においても、同様に研究の遅滞は指摘されてきた。とはいえ、むしろ、そうした事情がこの地域の環境への無関心をあらわすわけではない。ヨーロッパ中東部からロシアにかけて広がるこの一帯で、たとえばポーランドとベ

ラルーシの現国境地帯にひろがるビャウオヴィエジャのヨーロッパバイソンの保護など、環境問題への関心はむしろ潜在的に高かった（越野剛「ソ連時代のベラルーシの原生林とバイソンのイメージ」）。環境のことを「自然環境」ととらえるならば、土地や自然は人を取り巻くものとして、その精神性と関連付けられ、独自の価値を付与されてきた。古来より自然をテーマに文学が編まれて、そうした文学への批評には各々の伝統がある。たとえば、ポーランドに「風景論」の学問領域を開いた文学史家ヤツェク・コルブシエフスキ (Jacek Kolbuszewski: 一九三八—二〇二二) の著書は、一九世紀前半の分割時代から戦間期にいたるポーランド文学において「タトラ山脈」が担った表象の意味を明らかにする（「一八〇五年から一九三九年のポーランド文学におけるタトラ山脈」<sup>3</sup>）。ポーランドとスロヴァキアの現国境地帯を走るタトラ山脈は、とりわけポーランド・モダニズムの芸術家の間で、観念や思想の投影先としておおいに流行し、ときに神話的かつ非現実的な姿であらわされてきた。詩に描かれた山々の雄大な自然は、人間に人生の意味や目的、義務についての考察を促す。山は人間に生の儂さを教えるのであり、「若きポーランド」の代表的詩人テトマイエル (Kazimierz Przerwa-Tetmajer: 一八六五—一九四〇) は、自然を前にすれば人の存在が生死の絶え間ない明滅に過ぎないことを、印象派絵画にヒントを得た詩表現によって示した。その一方で、土地や自然は、帝国として主体的に領土拡大に努めてきた場合も、また複雑な領土変更が繰り返された被支配地域であっても、ナショナリズムの表出を引き受けてもきたのであり、失われたポーランド東部国境地帯「クレスイ」がその多言語性・多民族性にもかかわらず、ミツキエヴィチ (Adam Bernard Mickiewicz: 一七九八—一八五五) やミウォシシュ (Czesław Miłosz: 一九一一—二〇〇四) を介してポーランドの愛国心の醸成に結びついているのはその一例といえるだろう。<sup>4</sup>

ロシア・中東欧の自然や環境を考えるうえで、この地域が「帝国主義」と「共産主義」の過去を共有すること、そしてそれが、程度の差はあれ地域特有の環境問題を生み出していることにはとりわけ留意すべきと思われる。欧州の比較的狭い地域に集まるスラヴ語圏は、言語に由来する共通の文化基盤を有する一方で、旧共産圏と地勢

的にほぼ重なり合う。コーカサス山脈麓に位置するジョージアは「スラヴ語圏」ではないものの、かつてロシア帝国の植民地として様々な影響を被り、二〇世紀にはソ連の構成国であったことから、ロシア・ソ連へのまなざしを「東欧」のそれと比較されることもままある。ポーランド科学アカデミーのアンナ・バルチュは『ソ連・東欧の環境文化』のなかで、「集団農業や重工業による土壤汚染と水質汚染、放射能に汚染されたウラン鉱石の採掘」を理由に閉鎖された町の景色を、「旧ソ連圏諸国の中央集権的な地域経済が風景に残した痕跡のほんの一部」と述べるが、チェルノブイリ原発事故による環境汚染や、ロシア北極圏の産業開発とここに多発する森林火災、同じく北極圏の永久凍土の融解による土壤汚染など、地域に発する環境危機は、国家の環境政策やグローバルズムの議論と分かちがたく結びついている。それらがこの地域特有の倫理的・政治的な複雑さを伴い、被支配者であるマイノリティの存在を踏まえたポストコロニアリズムや、文学史書き換えの要請へ向かうことは、五月女論考（「A・カズベギ「ぼくが羊飼いだった頃の話」におけるパストラルの諸相」）や、クラブリ論考に示されるとおりだ（「北の隣人たち——エコクリティシズムおよびポストコロニアリズムの視点から見たロシア北極圏先住民文学」）。

環境危機に警鐘を鳴らす文学や映画は、地域を問わず、世界的に増加傾向にある。ポーランドの作家オルガ・トカルチュクは、熱心な社会活動家としても知られるが、二〇〇九年発表の小説『死者の骨に汝の犁を通せ』（菅原論文「森で死者の声を聴く——現代ポーランド文学の事例から」参照）は、推理小説をパロディ化しながら「動物の権利」を訴える「環境犯罪小説」とも称され、アグニェシュカ・ホラント監督によるその映画化は、カトリック教会を、狩猟の趣味を認める非倫理的なものとして描いたことでポーランド国内に保守と革新の対立の緊張をもたらした。これは近年の環境に対するこの国の意識のこれまでにない高まりと多様化の一例ととらえられる。こうした状況は、二〇一九年一月に行われたトカルチュクによるノーベル文学賞（二〇一八年度）受賞記念講演<sup>7</sup>と、翌二〇二〇年四月にドイツの新聞、つづいて本人のフェイスブックに発表された、パンデミック

に關する時事エッセイ（窓）によつて、とくに強く印象付けられることになった。<sup>8</sup> 両者は、世界的に深刻化する環境破壊への危機意識と、それに対する文学の役割を共通のテーマとし、そのことが世間の大きな反響を読んだ。ノーベル賞講演の方には、バタフライ効果（蝶の羽ばたき程のわずかな変化から連鎖的にひきおこされる世界規模の環境破壊）と自らの創作技法（星に見立てた断片的挿話をつないで、星座をつくるように物語を語る）とを結び付けて環境問題を語るという文学的仕掛けがあつたが、それ以前からこの作家は、環境に対する文学の役割についてきわめて意識的だつた。旅や移動をテーマとする小説『逃亡派』（二〇〇七）で描かれているのは、地球の果てまで移動が可能になつた人間の新しい自由の形、換言すれば、人間のきりなく広がる欲望の形だ。<sup>9</sup> 小説には、移住したポーランド人女性が死期の近い元恋人を祖国に訪ねる挿話がある。女性の父親は共産主義ポーランドを「人が住むには適さない国」だと言ひ、一家は地球の裏側のニュージールランドに移住した。娘は長じて生物学者になり、生態系保護のため、害獣退治の大規模プロジェクトに参加している。一方、飛行機を乗り継いでるばるの会に來た彼女に向かつて、瀕死の元恋人は「なんのために生き物を殺すのか」と問う。理由は一つ、移動を繰り返す人間が、もともとの生態系には存在しない生物を、「境界」を越えて持ち込んだせいだ。しかし、そんな「害獣」排除のプロジェクトも、結局は無駄であると彼女にはわかつてゐる。なぜなら、「閉じた生態系は、まもなく存在しなくなる。世界はひとつに混じるから」。彼女はじつは元恋人に、安樂死の介助を請われてやつて來た。自由な渡航は、かつて社会主義ポーランドではかなわなかつたことのひとつだ。しかしいまや生物学者は、元恋人の最後の願いをかなえると、再びやすやすと赤道を越えて、南半球の自宅に帰っていく。この挿話には、「神の国」という、皮肉なタイトルが付されている。ニュージールランド、別名「Godzone（ゴッドゾーン）」には、先住民の植民地化の記憶、人間が自然環境の変化にいわば暴力的に介入した歴史がある。物語は人間が生態系の「神」として命を選別する矛盾を、グローバル化の意味への考察を通して突きつける。

さて、トカルチュクが『逃亡派』で書いていたように、世界には「境界」が存在しないこと、世界が一つに混